北大路魯山人

［下巻］

白崎秀雄

Hideo Shirasaki

中公文庫

中公文庫

北大路魯山人（下）

定価はカバーに表示してあります。

1997年1月6日印刷
1997年1月18日発行

著　者　白崎秀雄

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yumi Shirasaki

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202780-2　C1123　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

北大路魯山人

下　巻

白崎秀雄

中央公論社

北大路魯山人　下卷　目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第三章（承前）
七、暮の馘首　9
八、氷裂文　33
第四章
一、人は虫けら　49
二、にせ帝王　72
三、姦通コムプレックス　93
四、女パトロン　100
五、四人目の妻　121
六、肥えた餌食　142
七、いくさは他事　163
八、片羽の鳥　186
第五章

一、獅子と豹　211
二、血染め井戸　244
三、土の神火の神　265
四、もはらこの道　293
五、病める獣　330

第六章

一、汝、星の如く　341
二、異国語　356
三、生家はいずこ　362
四、陽はたぎり落ち　379

あとがき　475
文庫本再刊に寄せて　478
北大路魯山人年譜　484

北大路魯山人　下卷

第三章（承前）

七、暮の馘首（くび）

星岡茶寮が全盛を誇り、魯山人が得意の頂点にあって奢りをきわめていた頃、茶寮の女中たちは如何様に働いていたか。

大塚末子きもの学院の院長大塚末子に『きものとともに』と題する、自伝がある。その中に、昭和四年、二十七歳で婚期の遅れた娘であった大塚が、妹の舅にすすめられ、星岡茶寮に勤めた時の回想が記されている。妹の舅は原色版印刷の先駆者で、竹四郎と懇意だったので、彼女はすぐに採用された。

彼女がつとめた期間は、わずかに十日ばかりにすぎない。二十歳前後の娘ばかりの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

中で、彼女はまったく「場違い」であることを覚って辞めたという。その勤めが短く、「場違い」であったことは、かえってその印象を鮮明にしたように、わたしには思われる。

星ヶ岡茶寮といえば料亭の中でも第一級で、（中略）ここで開かれる宴席は、日本の政治と深くつながっており、よく新聞にもその名が出ていました。

私が行った日は、ちょうど永田町の首相官邸へ出張の日で、食器類一切をととのえて、これから出かけるというのです。何もわからない私は、女中頭に頭を下げて、

「どうぞ、よろしうお願いします」

と、いうほかありません。女中頭は、

「あ、村橋さん、旦那様からきいてます。きょうはお道具の場所、おぼえといて下さい」

といって、忙しげに行ってしまいました。

本箱のような棚があって、その中に数え切れないほどの食器がギッシリ並んでいます。その中から、お向うが何十、お平が何十、青磁のお皿がいくつ、赤絵の大鉢がいくつと、係の人が言うとおり女中さんがそろえているのです。どれもこれも、

まるで博物館かなにかで見るような品で、われわれが家庭で見馴れている雑器とは比べものになりません。（中略）

翌日から私は食器の出し入れの係になりました。必要な食器を言われた通りに出し、済んだ食器を拭いてしまうだけですが、それは重労働でした。（中略）コップを拭くのもたいへんで、下拭き、中拭き、清拭きと、三人の女中が輪になって拭くのです。

広い台所では、いろいろの係に別れて働いています。鰹節をかく人は、一日中かいていて、赤味のところはお出し、背のところは何のお出しと区別してあります。（中略）魯山人というやかましいおじさんがいて、お料理ができると調理場へ出て行って、おつゆの味加減をみるのがつとめでした。用のない時は、自分の部屋に籠って、太いロイド眼鏡をかけて書きものをしていました。

ご主人の中村竹四郎さんは白足袋をはいて、清月尼ばりの細いきれいな字で、色紙にその日の献立を書くのが仕事でした。

こうした表のきびしさも、裏に入るとがらりと変ってしまいます。女中さんのお座敷着はお揃いの紫のきものに金茶の帯で、帯にふくさをはさむのです。しかし、

一歩女中部屋に入ると、紫のきものを脱ぎ、浴衣の衣紋を思い切り抜き、伊達巻一つに横坐り、なにやらむしゃむしゃ食べながら、お客さまの品定めです。近衛さまがどうだった、徳川さまがどうだったと、つぎつぎに飛出す名前は一流の方々ばかり。それがどうした、こうしたと、まるで隣の小父さんの噂話のようなロぶりです。

かと思うと、これから出番の人が、双肌ぬいでお化粧のまっ盛り。髪油の匂い、おしろいの香り、若い女の体臭が充満しています。（中略）

その上、私たちの食事というのが恐れ入りました。大きなバケツに冷奴が泳いでいたり、きゅうりもみがギッシリつまっています。それをてんでに取り分けて食べるのです。大きな口をあけて、たくあんをバリバリ、ご飯にお茶をかけて流しこむ芸当は私にはできませんでした。

それにしても、廊下の戸棚に並んでいる器と比べて、なんという違いでしょう。女中の身なのだからこれが当り前かも知れませんが、どうにもやりきれなくなりました。

星岡茶寮の女中は、初め二十五人ぐらいいた。いずれも無地の紫色の着物に黄八丈の帯をしめさせ、袱紗を挿ませる。髪結いをよんで、髪をつねに七三に結う。外出に

好みの髪型にするのは各自の自由だが、眼鏡女は採用しない。

武山によると、あまりいい女はいなかったが、たまに美人が来た。すると魯山人は、ソワソワして廊下で鏡をのぞいて髪をなでつけたり、シャツの襟を直したりした。あるとき入って来た美人には、加谷軍治という帳場の係が熱くなったけど振られたという。

給料も他よりよかったから、いわゆる十人並み以上の女が集ったらしい。今日、料亭の女中というと世帯崩れの中年女が多いが、戦前一流料亭とか旅館の女中には若くて美しい女が少くなかった。田舎の中学生のわたしは、稀に使いか何かでそういうところへ行くと、眩い思いをしたものだった。あの女たち、ああいうところにいたああいう女たちは、今の社会ではどんなところへ行ってしまったのだろうか。わたしは、ふしぎな気がすることがある。

武山が星岡茶寮の料理主任に任じられていたのは、昭和五年から同七年までの二年間である。その間に、年末十二月三十日頃になると決って魯山人が武山に強いたことがある。料理人の中の、魯山人から見て成績不良の者への、馘首のいい渡しであった。

「この三人はダメだ、やめさせよう」

と、魯山人は武山をよびつけ、名を書いた紙片を示していう。当時はむろん、失業保険も健康保険もない。名古屋あたりから東海道を歩いて関東東北の農村へ帰るような失職者が少くない状況の社会へ、庖丁一本の料理人たちが放り出されることは、何を意味するか。たださえ凍てつく歳末に。

せめて春まで置いてやってもらえないか、という意味のことを武山は、おそるおそるいう。

「武山、いくさをするにはな、信長流に退却する部下を斬らなくちゃ進撃できないんだ。その心掛けをお前だってわかるだろ」

魯山人は武山をはげます。

「先生」や「旦那さん」でなければ、帳場の人とかそれこそ秦などからいい渡してもらえぬものかという気もし、すこしはその意を洩しもしたが、「なんのための主任だ！」と一喝され、返す言葉もなかった。

「わるいけど、他をさがしてもらえないか」

と、一言いうのが、武山には血をしぼり出すような思いだった。いわれた者たちは、甕からとり出した藍染めの布のように、たちまち色青ざめる。肩を落して帰る彼らに、

先生も自分も恨みを買うことはないだろうか。武山はそうも思った。

わたしは、この話をきくとまた例の魯山人の嗜虐癖とでもいうべきものを想い出す。親から金を出させよと迫りつづけ、出さないといって責め抜き、あたら美貌を朽ち果てさせられた、藤井せき。小遣いをせびりに来た晩年、やるでもなくやらぬでもなく、ジリジリするのをじっと観察されていた、実母のトメ。牛の木彫の買い戻しをたのみに来たときの、鎌倉の貧僧。

魯山人は、年末に馘首した料理人たちが、苦渋にみちた顔付きで、悄然と風呂敷包みなど提げて星岡茶寮を去って行く姿を、そっと二階のどこかから、見下していたのではなかろうか。

この得意の時代の魯山人を、陰で悪口しなかった者は少い。

この頃の世間の魯山人を見る眼について、竹葉亭の別府得三は、昭和五十八年になおいう。

「魯山人を知る人十人に別々にきけば、九人が魯山人の敵でした」

露わに反感を示した者も、稀にはあった。

その一人は、速水御舟である。才能あるこの秀才は、その後も次々に日本画の可能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com